

## 第九章

コンドルセ氏による、人間の有機的完全化と人間寿命の無期限延長についての推測——どこまで改良できるか定かでない部分的な改善から、無制限の進歩を導く議論の誤り——畜の育種と植物の栽培の例で示す

コンドルセ氏が最後に問うのは、人間の有機的完全化は可能かどうか、という点である。彼は次のように問う。これまで示してきた証拠が議論の進行とともに重みと説得力を増し、いまの生得的能力と身体の組織を前提にしてもなお、人間の改良可能性は限りなく広がり得ると示せるなら、どうなるか。さらに、その能力や身体の組織そのものがいつそう発達し得るとすればどうか。そのとき、確実性、すなわち確信の度合いはいかほど高まり、希望の射程はいかほど広がるのか、と。

医療は進歩し、食生活と住環境の健全化が進み、節度と運動で体力を養う生活様式も広がり、人間を堕落させる一大原因とされる困窮と過度の富のはじ正も進んでいる。さら

に、理性と社会秩序の進展を背景に自然科学が発達し、その結果、伝染性疾患はしだいに減少している。以上を踏まえ、彼は、人間は絶対的な不死には達しないとしても、生まられてから自然死に至るまでの期間は絶えず延び続け、確たる限界は定めがたい、とし、これを「無限定」「不定」「無期限」と呼ぶのが妥当だとみなす。さらに彼は、この語を、到達不可能な無限に絶えず近づき続けること、あるいは、きわめて長い年月を経て、いかなる有限量も上回るまで増大することを指す、と定義する。

この語を人の寿命の長さに当てはめることは、いずれの解釈においても科学的裏づけを欠き、自然法則の観察にも支えられない。原因の違いによる変動は、規則的で一方向の増加とは本質的に別物である。平均寿命は気候や食の衛生、生活習慣の節度などによつてある程度は変動し得るが、信頼できる人類史の記録が始まつて以来、自然寿命そのものが目に見えて延びたと言い切れるかどうかには、なお疑いが残る。加えて、各時代の通念はこの想定と相容れず、通念を過大視しないとしても、少なくともそれと反するほどの顕著な伸びや進展があつたとは言いたいことを示している。

世界はいまだ発展の初期段階、いわば誕生間もない幼年期にあり、短期間で明確な差異が現れることを期待すべきではない、という見方もある。

もしそれが事実なら、科学はたちまち行き詰まり、結果から原因へと遡る推論の道筋は根底から崩れる。そのときは自然という書物を閉じてしまつてかまわないし、綿密な反復実験に裏打ちされた精密で高度な理論も、最も奔放で信頼性の乏しい臆測や突飛な推測と、同じ確かさと重みで語られることになる。事実にもとづき体系を築くのではなく、体系に合わせて事実をねじ曲げる旧い哲学への逆戻りであり、ニュートンの壮大で首尾一貫した理論は、デカルトの奇抜で特異な仮説と同列に置かれてしまう。要するに、自然法則が移ろいやすく一定せず、幾世紀ものあいだ不変と見なされてきたものさえ変わり得るのだと信じるなら、人間の知性は探究の意欲を失い、惰性に沈むか、混乱した夢想や過剰な空想に耽るばかりになる。

自然法則と因果関係の恒常性は、人間の知識の基盤である。もつとも、それらを規定する同じ力が一瞬にしてその状態を変えうる可能性も否定はできず、その種の変化が起こり得るという事実自体は認めざるを得ない。要するに、観測に基づく兆しや手がかりが一切ないかぎり、純粹な理屈だけでそうした変化を結論づけることはできない、ということである。兆しもないのに変化を見込めるのだとすれば、あらゆる主張が同列になり、明日月が地球に衝突すると断言する説でさえ、太陽がいつもどおりの時刻に昇ると

いう主張と同程度にしか退けられない、という不条理に陥る。

人の寿命が古代から今日まで一貫して伸び続けてきた、と示す確かな証拠はない。気候や生活習慣、食事の影響を根拠に、上限が定まらない以上、寿命は無期限に延ばせる、とする見方もある。しかしその前提は脆弱で、妥当性を欠く。フランスの思想家コンドルセ氏が自然の一般法則の一つに数えた、植物や動物の種に見られる「有機的完全化」と「退化」の概念に照らせば、その誤りは明らかである。

家畜改良の現場には、選抜交配を重ねれば望むだけ改良を進められる、という格言がある。その根拠は、子の一部が親よりいつそう望ましい形質を示す、という経験則にある。著名なレスター種の羊の育種では、頭部と脚を小さくすることが目標とされてきた。だがこの格言を文字どおりに拡張すれば、ついには頭や脚が消えるほど小さくできるはずだ、という結論に至ってしまう。これは明らかに不合理であり、その前提が妥当でないこと、実際には限界があることを示している。最適点、すなわち頭部と脚の最小サイズはまだ確定していないにせよ、それは無制限ではなく、コンドルセ氏の言う「不定」と同義でもない。改良がどこで止まるか特定できないとしても、到達しえない水準があることは明白であり、交配をいくら続けても、これらの羊の頭や脚が鼠ほど小さくなる

ことはない。

したがつて、動物に関して、親の望ましい形質が子で親以上に強まるという説や、動物は際限なく改良されて完全へと近づき得るという見方は、事実に反し妥当ではない。

野に自生する植物が観賞用の園芸種へと改良され、荒地の草木が見事な庭園の花へと変わっていく過程は、動物のどの例よりも明瞭である。しかし、その発展を際限のないもの、あるいは方向づけのない不定なものとみなすのは妥当ではなく、そう断じる根拠もない。

改良で最も目立つ特徴の一つは大きさの拡大であり、栽培を重ねるほど花は段階的かつ着実に大きくなる。もし進歩が無制限なら、理屈の上では無限に大きくできるはずだが、それは不合理で、植物にも動物にも改良の上限があることは確かだ。ただし、その上限がどこにあるかは正確にはわからない。花の品評会で競う園芸家でも、施肥や手入れ、管理をどれほど徹底しても成果が上がらないことは少なくない。他方で、将来作りうるものの中最高のカーネーションやアネモネをすでに見たと断言するのも早計だ。とはいっても年月を重ねて確かめても、栽培によってカーネーションやアネモネをキヤベツ並みの大きさにまで育てることは不可能だと言い切れる。そして、キヤベツ

をはるかに上回る大きさを目標に掲げること自体はいかにも容易い。誰も到達しうる最大の小麦の穂や櫻の木を見たとは言えないが、そこには届かないと確信をもつて指示示せる規模の境界を挙げるのはたやすい。結局、区別すべきなのは、進歩が無制限である場合と、限界はあるがその位置が不明なだけの場合である。

植物や動物が無限に大きくならないのは自重に耐えられず倒れるからだ、という見方もある。しかし、その根拠は結局、それぞれの身体の強度に関する経験に頼るほかない。たとえば著者の経験では、カーネーションはキャベツ並みの大きさに達する前に茎が自重を支えきれなくなる。だがこれも、茎の材料が弱く粘りに乏しいという自身の経験にもとづくにすぎない。自然界には、同じ程度の寸法でもキャベツの玉ほどの大きな部分を支えうる材料が少なからず存在する。

植物がなぜ死ぬのかは、いまも十分には解明されていない。なぜある種は一年生で、別の種は二年生で、さらに別の種は長い歳月にわたり生き続けるのかも説明できない。要するに、植物や動物、そして人間にに関するこの問いは経験の域を出ない。私たちの目に見える身体を形づくる物質は滅びうる、という事実をあらゆる時代の経験が示してきた以上、人間は死を免れない。

私たちの推論は、すでにわかっている事柄を前提にしてしか成り立たない。人は、既知の事実を土台にしなければ論理を組み立てられない。結局のところ、推論はそうした知識にもとづくほかない。

健全な判断に立てば、人類が寿命の無制限な延長に向けてすでに決定的な前進を遂げ、なお続いていることが明確に示されないかぎり、「人は必ず死ぬ」という見方を改めるべきではない。植物と動物の二例を挙げた主な狙いは、部分的な改善や向上が見られ、その限界を厳密に定めがたいという事情だけを根拠に、進歩は無制限だと結論する論法の誤りを、具体的かつ平易に示すことにあった。

植物や動物は改良が可能だという認識は広く共有され、実際に進展も見られる。しかし、だからといって進歩に限界がないと断ずるのは不合理だ。人間については、条件の違いによる差こそあれ、世界の始まり以来、人体が遺伝的に改良されてきたと明確に立証されたとは言いがたく、人間の身体的完全化を唱える議論の土台は脆弱で、推測の域を出ない。ただし、婚姻を選び血統に配慮すれば、動物の場合と同様に、人間にも一定の改良が起こり得る可能性は否定できない。知性の遺伝は不確かだが、体格や筋力、容貌、肌の色や性質、さらには長寿まで、程度の差はあれ遺伝し得る。誤りは、小幅な改

良を認めることが自体ではなく、上限のある小改良と無制限の改良を区別しない混同にある。しかも、この方法を徹底するには「劣った例」を生涯独身にせねばならず、血統選好や繁殖管理が広く定着する見込みは乏しい。実際、その種の周到な実践は古い家柄のピッカースタッフ家を除いて見当たらず、同家は思慮深い婚姻によって家系の肌の色をより白くし、身長を高めたと伝わる。とりわけ、乳搾りをしていた娘モードとの適切な婚姻が、一族の体质の重大な欠点の幾つかを補い是正したという。

私は、人間がこの世で不死に近づく可能性は低く、人類がそれに接近する見込みも現実的ではないと考える。この点は、寿命延長が人口論に及ぼす影響の大きさを取り立て強調したり、寿命の伸長が人口論をどれほど左右するかをことさらに持ち出したりしなくとも示しうる、という立場だ。

多くの人は、この世での人間の不死や人間・社会の完全化といった突飛で常識外れの主張には、正面から論じて反駁するのは時間や紙幅の無駄で、根拠のない憶測は無視するのが賢明だと考える。しかし私はそうは思わない。こうした主張を才気に富む有能な人びとが掲げると、放置しても誤りは正されない。彼らはそれを自らの理解の広がりや思考の規模、広い視野の証しと受け取り、無視を同時代人の知的営みの貧しさや偏狭さ

の兆候と見なし、世界はまだ自分たちの高邁な真理を受け入れる段階に達していないだけだと結論づける。

これらの問題を率直に検証し、健全な哲学に照らして妥当な理論はためらわず採用する姿勢をとるなら、起こりそうにない仮説や根拠の薄い仮説は、科学や学問の地平を広げるどころか狭め、知性の発達や精神の向上をも妨げる、と説得できるはずだ。なぜなら、こうした仮説は私たちを知の幼年期へ押し戻し、近年の急速かつ顕著な前進を支えてきた思索と探究の基盤を弱めるからである。昨今流行する、際限のない大仰な思弁への熱狂は、諸分野で相次いだ予期せぬ大発見がもたらした精神の陶酔に由来するよう見える。成功に舞い上がった人びとは、人間の力で万事が可能だと誤信し、実証的な進展を示せない課題を、進歩が見込めるときてきた領域と取り違える。しかし、厳格で抑制のきいた思考で頭を冷やせば、辛抱強い検証と探究、そして確かな裏づけを、奔放な憶測や根拠のない断言に置き換えることは、結局、真理と健全な哲学の利益を損なうとわかる。

コンドルセ氏の著作は、特定の著名人の見解の概説にとどまらず、フランス革命初期に活動した多くの文筆家や知識人の見解の輪郭も浮かび上がらせており、たとえ素描的

な概説にとどまるとしても、看過できない重要性をもつ。